

知らなくて良かった 矢部雅之

恥かしながら彼女を私は知らなかった。三歳でピアノを始め、五歳で、ピティナピアノコンペティション全国決勝大会に最年少出場。以来、数々のコンクールで最年少優勝。八歳でオーケストラと初共演。九歳、パリで海外デビュー……。どれも、知らなくて良かった。四月三日、カーネギーホールで、ピアノスト小林愛美氏のソロリサイタルが開かれた。明るい水色のドレスを着てステージに現れると、客席に向き深く一礼。椅子に腰を下し、クロスで鍵盤を軽く拭うと、譜面台右側に置く。首のペンダントを両手で包み、目を閉じて俯き、右前腕部に左手を載せる。そのまま二十秒ほど、折るかのようには動かない。その後、しずかに鍵盤上に手をあげ更に一瞬の静止。そこから、怒濤の情熱的演奏は始まった。第一部の演目は、ベートーヴェンのピアノソナタ第八番「悲愴」と同第二十三番「熱情」。いきなり重量級の選曲だ。時に、まるで頭頂部を天から吊り上げられたかのように、椅子から腰が浮くほど伸び上がり、また時に、眉にかかるくらいの長さに切られた前髪がピアノの前框にかかるほど上体を鍵盤上に被せ、全身でキータッチをコントロールしながら濃厚で表情豊かな音を繰り出し続ける。カーネギーでは小ホールに当たるが天井が高く容積も大きいワイル・リサイタル・ホール中の空気が、当然のように心地よく鳴る。目は殆ど瞑ったまま。頭の後ろ側で留めた長い髪の一部

が顔の左側から時折こぼれ鍵盤にかかるが、それを一瞬の首の動きではね上げると、左頬をピアノに更に寄せる。曲想に合わせ制御された呼吸からは、時に苦しい吐息が微かな声を伴って漏れる。変な喩えだが、まるでピアノと交わるかのようにエロティックだ。演奏後、聴衆にまた深々と一礼。その表情は先程の妖艶さが嘘のような、少女らしい陽性の実顔だ。その対比がまた心に残る。休憩後の演目は、ラヴェルのソナチネ、そしてショパンのスケルツォ第一番とバラード第一番。聞く者の心に第一部の余韻があるからか。ラヴェルが、ベートーヴェンのように濃厚で熱い響きを帯びて聞こえる。「実はこんな曲だったのか」と私は気付きを愉しんだ。アンコールは先ずシューマンの「トロイメライ」、モシユコフスキのエチュード第六番。そして最後にショパンのノクターン第二十番。椅子の上で客席の方に半身になり、まだ幼さの残る声で英語のメッセージを読み上げる。「I will play Chopin nocturne C-sharp minor. I would like to dedicate this piece to the people who are suffering with earthquake and tsunami in Japan.」震災から時が経つにつれて他の出来事に移してゆく異国の聴衆に被災者の立場への注意を喚起する。演奏と直接関係の無いこうしたメッセージを出すのは、カーネギーでの初ソロリサイタルで自らの演奏を提示し評価を請う立場の彼女には、リスキーな選択肢かも知れないのに、それをあえてしてくれたことが一日本人として嬉しい。ショパンの夜想曲の中でもとりわけ暗く重いこの曲も、ピアノを始めた頃から弾き続けてきた、と自身言うだけある、充実した演奏だった。それにしてもこの十五歳の事を知らなくて本当に良かった。十五歳！そんな情報を事前に知っていたら、私の耳には様々な雑音が乗ったろう。そんな雑音抜きに演奏を聴き彼女のピアノを好きになれた。その幸運が嬉しい。